

政略結婚のエリート御曹司は
蜜愛をご所望です

毎年、この時期になると「武本旅館」の裏手にある竹林の若竹が芽を出す。新筍の若竹煮は旅館の名物料理のひとつであり、こだわりの逸品でもある。

「うわぁ、美味しい！ さすが『武本旅館』の若竹煮は、一味も二味も違うよね」

今年最初に作られた筍の煮物を食べた武本理沙は、一口食べるなり満面の笑みを浮かべた。

「筍もわかめも味が染みてるし、器と上にちよこんどのつてる木の芽も合わせて、ビジュアルも最高だね」

理沙の実家は「武本旅館」という温泉旅館で、東京近郊の温泉街に創業して今年で七十六年になる。

建物は三階建てで、客室は十室。自慢は山と溪谷に囲まれた環境と四季折々の風景と料理で、一度泊まればリピーターになること請け合いだ。

季節は春。

三月になったばかりの木曜日、理沙は何カ月ぶりかで両親とともに少し早めの夕食の席に着いていた。

家族が住む家は庭を挟んだ旅館の裏手にあり、何かあればすぐに仕事に戻るようになっていた。普段は各自手が空いた時に食べるから、こうして一家揃っての食事はかなり久しぶりだ。

横長のテーブルに両親が並んで椅子に腰掛け、理沙は二人の正面に座る。

食卓に並ぶのは母の手料理で、どれも簡単に作れるものばかりだが、それぞれに愛情が籠もっていて味わい深い。

しかし、家族団らんのひとは、旅館の経営者である理沙の父・栄一の話聞いた途端、あっけなく崩壊してしまった。

「理沙。実はな——」

そう切り出した栄一が語ることは「武本旅館」の経営はかなり逼迫しており、このままでは存続できない状況にあるらしい。そこへ買収の話が持ち込まれ、両親はそれを受け入れるしかないと言っている様子だった。

「嘘でしょ!? うちが買収されるとか……そんなの、冗談だよな?」

両親から買収の話を聞くなり、理沙は目を剥いて大声を張り上げた。

「いや、嘘でも冗談でもない。ずっと隠していて悪かったが『武本旅館』はもう火の車なんだよ」

栄一曰く、物価の高騰や観光業界全体の低迷など、経営悪化の理由はいろいろある。それら乗り越える気概はあるけれど、基盤となる財力が底をついてしまったのだ。

「なんとか頑張ってきたけど上手くいかなかったし、思うような結果は得られなかったわ。建物も老朽化してきているのに、建て替えるためのお金がないの。貯金も取り崩してほとんど残っていない

し、買収を受け入れるほかに手立てがないのよ」

旅館の女将である母の美和子がそう言い、深いため息をつく。

「それに一昨日、市役所の建築指導課から連絡が入って、建物の老朽化と耐震性に問題があるんじゃないかって言われたの。それで、近々立ち入り検査を実施したいって。検査されたら、改修が必要だって言われるに決まってるわ。けどうちにはそんなお金はないし、もう八方塞がりなのよ」
人一倍真面目で努力家の父親はともかく、いつも明るい笑顔を絶やさない母親が、見たこともないほど悲痛な表情を浮かべている。

両親の深刻な様子を目の当たりにして、理沙はようやく事の重大さを理解した。

「買収って、どんな形で? まさか『武本旅館』がなくなるってことじゃないよね?」

「それは今後、相手先と話し合うことになるだろうが、どうであれ『武本旅館』はもう自力でどうできる状態にないんだ」

項垂れる栄一の背中に、美和子がそっと手を添える。

はじめて聞かされた旅館の現状に驚き、理沙はただ呆然として寄り添う両親を見つめ続けた。

「そんな……」

理沙にとって『武本旅館』は生活の地盤であり、なくてはならない存在だ。

生まれた時からここにあり、それを当然だと思ってこれまで暮らしてきた。それなのに、今さら買収されて人手に渡るなど、受け入れられるはずがなかった。

「だけど、何かしらまだできることがあるんじゃない? 老朽化してるところは自分たちで直すと

かできないかな？ 昔はよく、おじいちゃんがトンカチを持って屋根に上ったり縁の下にもぐったりしてたよね？」

旅館の先代である理沙の祖父は次男で、成人後は大工として地域で一番大きな工務店に勤めていた。しかし、本来旅館のあとを継ぐ長男が急逝^{きゅうせい}。先代は急遽^{きゅうきょ}「武本旅館」を継いで、今から八年前に他界した。

祖父が旅館を修復できていたのは、彼の大工としての確かな腕があつてこそそのものだ。

それをわかつていながら無意味な発言をしてしまったのは、旅館の危機を知って真っ先に浮かんできたのが祖父の顔だったからだ。

『理沙。くれぐれも「武本旅館」を頼んだぞ』

晩年の祖父は病床に就いており、亡くなる直前まで旅館のことを気にしていた。

むろん、頼まれたのは理沙だけではないし、一念を押されていたのは後継ぎだった栄一だろう。しかし、理沙は祖父と特に仲が良かったし、トンカチを持って旅館の点検をする彼について回るのが好きだった。

最新鋭の設備が自慢の高級宿泊施設もいいが、理沙にとっては小さな傷のひとつひとつにその時々^{とき}の歴史が刻まれている「武本旅館」に勝るものはない。

幼かった理沙のお気に入りの遊びは新旧の女将^{おかみ}を真似ての旅館ごっこだったし、舞台はもちろん「武本旅館」だった。

物心ついた時から建物の中を歩かない日はなかったし、これからも歴史は続いていくと信じて疑

わなかった。そんな大事なものが人手に渡るなんて、どうしても受け入れられない。

「お姉ちゃんは？ このことは知ってるの？」

「ええ。環^{たまき}には、先週の休みに会いに行つて事情はすべて話したから」

理沙より三つ年上の姉、環は高校卒業を機に家を出て都内の大学に進学した。卒業後は都心にある外資系のホテルに入社し、今もそこで働いている。

それは将来的に「武本旅館」の女将^{おかみ}になるための修業の一環であり、家族は皆そのつもりで力を合わせて頑張ってきたのだ。

それなのに、いったいいつから今のような状況^{ばうき}に陥^{おち}つてしまったのだろうか……

「それで、お姉ちゃんはなんて？」

「仕方ないって言つてたよ。環には前々からうちの経営状態が悪いことは伝えてあつたし、資金調達ができないなら買収はやむを得ないって」

「黙つてごめんね。理沙には、もっと早く言わなきゃいけなかったわよね。でも、いろいろと頑張ってくれている理沙を見ると、どうしても言えなくて。お父さんとギリギリまで頑張ろうって話しているうちに、とうとう限界を迎えちゃつて……」

栄一が答え、美和子が口添えをする。夫婦は顔を見合わせたのち、同時に理沙を見てすまなさそうな表情を浮かべた。

「そうなんだ……。ごめん。私、そんな状況^{ばうき}に陥^{おち}つてるなんて、ぜんぜん知らなくて……」

「いや、理沙は謝らなくていい。俺がいけなかったんだ。俺がもっとしっかり考えて経営していれ

ば、こんなことにはならなかったのに……。情けない父親で、本当にすまない」

「お父さんだけが悪いんじゃないわ。私も、もつとちゃんと経営に口を出すべきだったのよ」

美和子が言い、栄一の背中を労うようにそつと撫でる。

父母は昔から仲が良く、この地域では知らない人がいないほどのおしどり夫婦だ。そんな二人が守り続けてきた「武本旅館」がなくなるかもしれないなんて、にわかには信じがたい。

（いったい、いつからこんなことに？）

部屋数は十室と規模は小さいが、「武本旅館」は家庭的なもてなしと料理が自慢の宿だ。

長年通つてきてくれる常連客もいるし、繁盛しているとは言えないまでもそれなりに稼げていると思つていたのだが、そうではなかったのだろうか？

「でも、なんで急に検査が入ることになったの？ だって、いきなりすぎるし、疑いたくはないけど、もしかして誰かが役所に連絡をしたのかも？」

急な検査が入る場合、どこから告発を受けての対応や、密告の可能性が高い。

「それは、わからないわ。だけど、それがなくても赤字続きだったし、いずれは旅館をたたまざるを得なかったでしょうね……」

美和子が心底悲しそうな表情を浮かべながら、しょんぼりと肩を落とす。

理沙は武本家の次女であり、旅館を継ぐのは環だ。そのため、経営には一切口出しすることを控えてきたし、あえて収支関連の数字も見てこなかった。

こんなことなら、もつと経営に関わつていればよかった。

そう思つたものの、仮にそうしていても、今の危機的状況を避けられたかどうか……

いずれにせよ、もうのつぴきならぬところまで来ているということだった。

「それで、どこがうちを買収するつていう話になっているの？」

理沙が訊ねると、栄一が軽く咳払いをする。

「実は少し込み入つていて、うちをどうこうしようとしている会社の候補は二社あるんだ」

「二社？ うちつて、そんなに目をつけられてたの？」

「うむ……順を追つて話すと、最初に話を持ち掛けてきたのは外資系投資ファンドの会社で、うちを買収取つて長期滞在者用のコンドミニアムを建設したいそうさ。この話だと『武本旅館』は廃業を免れない」

栄一が重々しい声で話しながら、沈痛な表情を浮かべる。

廃業という言葉が胸に刺さり、理沙は眉を顰めて苦い顔をした。

「コンドミニアム？ そんなの、ダメに決まつてる！ この辺りの景観に合わないし、代々ここで頑張ってきた歴史が、ぜんぶなかったことになるのも同然じゃないの！」

にわかには信じられないような話を聞かされ、理沙は思わず声を荒らげた。

この辺りは純和風の建物ばかりで、そこに洋風の建築物が建つなどものほかだ。

周辺の人たちも同様に思うだろうし、この場所にコンドミニアムが建とうものなら、地域住民に對して申しわけが立たない。

ここに限らず、全国の温泉地にもインバウンドの波は押し寄せてきている。

需要があるのなら、ある程度の変化はやむを得ないかもしれない。けれど、大切な歴史や文化を壊すことだけはしてはならないだろう。

「もうひとつは、どんな感じなの？」

「そこは、今話した買収話を聞きつけて話を持ち込んでくれたんだが——」

栄一が言うには、もうひとつの買収元は理沙と同意見で、コンドミニアムの建設には反対のようだ。その上で「武本旅館」を再建させるべく資金提供をする考えでいるらしい。しかも、場合によつては旅館の経営権は武本に残したまま、スポンサー契約をすることも可能だ、と。

「スポンサー契約って、よくスポーツ選手とかが企業とするやつ？」

「同じと言えば同じだが、それとはまた別というか……。とにかく、うちは資金提供してもらえし、経営権は保持したままでいられる。つまり、うちにはメリットしかないということだ」

「何それ？ それって、話が美味すぎない？」

理沙は目を丸くして、声を大にする。願ってもない話だが、さすがに胡散臭^{うさんくさ}すぎて手放しでは喜べない。

「その話、何か裏があるんじゃない？ 後々、とんでもない負債を背負わされるとか、旅館どこか家まで根こそぎ持っていかれるとか」

「いや、さすがにそれはないと思う。……なあ、母さん」

「え？ ええ、そうね」

理沙が疑問を呈^{てい}すると、栄一が曖昧^{あいまい}に否定して美和子と顔を見合わせる。なんだか歯切れが悪い

し、二人の様子もどこことなく妙な感じだ。

何かしら、まだ口にしていない重大な秘密でもあるのだろうか？

理沙は両親の顔を交互に見ながら、首をひねった。

「何せ、相手は信頼できる大手だからな。ただそれには条件があつて、詳しい話をしたいから一度理沙に時間を取ってほしいそうなんだ」

「えっ、私に？」

理沙が自分を指さすと、栄一と美和子が二度、三度と頷く。

「なんで？ どうして、お父さんでもお母さんでもなく私なの？ っていうか、いったいこの誰がそう言ってるの？」

理沙がそう訊ねると、栄一がテーブルの向こうからグツと身を乗り出してきた。

「それなんだが……。実は『ホテル室月^{むつき}』の敦司^{あつし}君なんだ」

「はああ!? 敦司が？」

驚きのあまり、理沙は椅子から立ち上がって目を剥^むいた。

室月敦司——

理沙の幼馴染にして喧嘩友達でもある彼は、同じ温泉街にある大型リゾートホテル「ホテル室月」の若き経営者だ。

幼い頃は一緒に近所中を駆け回って遊んだし、毎日のように顔を合わせていた。今もその頃の関係は続いており、会えばなんだかんだとよく話をする。

ともに負けず嫌いだが、理沙は閃くとすぐに行動に移す感覚派で、敦司は理屈を捏ねながら石橋を叩いて渡る理論派だ。

そんな二人は、お互いに遠慮がないせいか、話している最中によく言い合いになる。しかし、怒りをあらわにする理沙に対して、敦司はムキになる幼馴染を飄々とした顔でかわし、話をすり替えるなどしていつの間にか口喧嘩を終わらせてしまう。そのせいか、どんなに言い合いになっても縁が切れるほど険悪にはならず、そんなところも合わせての腐れ縁だ。

敦司とは連絡先を交換しているし、つい先日にも用事があってSMSでメッセージをやりとりしたばかりだった。

それなのに、なぜ彼は買収の話を事前に教えてくれなかったのだろう？

にわかに憤りを感じて、理沙は眉間に皺を寄せた。

「だいたい、なんで敦司がうちの買収話を知ってるの？」

理沙がふと疑問を口にする、栄一がサッと視線を外した。

栄一は昔から自分に都合の悪いことが起きそうになると、すぐに目を逸らす癖があるのだ。

「あっ！もしかして、お父さん？」

「えっ……うん、実はそうなんだ。でも、この問題はうちだけで抱えるには大きすぎるし、この地域全体に関わる問題だ。どのみちしかるべき人に相談しなければならぬと思っていたんだよ」

「ホテル室月」と「武本旅館」は、いずれも地域の温泉旅館ホテル組合に加入しており、二人はともに組合の副理事長を務めている。

そう言えば、栄一と敦司は、組合の会合が終わったあとに、よく自分たちだけで飲みに行く聞いていた。若くはあるけれど、敦司は大企業の役職に就いているだけあって見識も広く経験値も高い。

おそらく、組合の活動を通じて自然と親しく話すようになり、それが今回の買収話に彼が介入することに繋がったのだろう。

外資系投資ファンドに買収されて「武本旅館」の歴史が無下にされるくらいなら、敦司の話に乗ったほうが何倍もマシだ。

しかし、どう考えても美味すぎる話だし、何かしら企んでいるようにしか思えない。

「まあ、座りなさいな」

美和子に促され、理沙はむっつりした顔をして椅子に座り直した。

「敦司君は『ホテル室月』の社長ではなく、『室月ホテル&リゾート』の副社長として買収の話を進めたいと言っている。ちなみに、もう社長の承認も得ているそうだ」

「はあ？敦司ったら、何を勝手に話を進めてるのよ。そもそも、どうして彼がうちの問題にそこまで首を突っ込むの？」

「室月ホテル&リゾート」は「ホテル室月」の親会社であり、敦司は同社の副社長を兼務している。しかし、だからといって彼の一存で買収話が進むはずがない。もう本社決裁が下りているようだが、いったいどういう経緯でそんな話になったのだろう？

「室月ホテル&リゾート」は、ここを含めて国内で六つのホテルを経営している。

そのほかにもゴルフ場やレストラン経営などにも事業を広げており、同社は今や従業員数が千五百人を超える大企業だ。

その礎となる「ホテル室月」がオープンしたのは明治中期で、敷地面積はおよそ二万七千平方メートル。部屋数は百二十室で、顧客には国内外のVIPも多数いると聞いている。敷地内にはレストランやラウンジなどのほかにリラクゼーションサロンやジム、屋内外のプールといった施設が充実しており、本館の横にある別館は今後結婚式場にリニユールする予定であるらしい。

総じて「ホテル室月」は歴史、格式ともに温泉街にあるほかの宿泊施設とは一線を画す存在だ。そんな大企業が、なぜあえて経営が逼迫している「武本旅館」再建の手助けなどするのだろうか？コンドミニアムの建設を阻止し、景観を守るため？

これについては、なんとしても実現を阻まねばならない。

しかし「武本旅館」の再建にはかなりの金額が必要になるだろうし、景観保持が目的ならもっと安価でたやすい方法があるはずだ。

そもそも「室月ホテル&リゾート」が「武本旅館」の再建に手を貸して、なんのメリットがあるというのか。

今回の買収話は疑問だらけだし、栄一の説明だけでは何ひとつ納得がいかない。けれど、両親はもう敦司からの申し出を受けるつもりでいる様子だ。

だが、本当はどうだろう？

いくら「武本旅館」再建のためとはいえ、思うところがあるのではないだろうか。

「室月ホテル&リゾート」の経営は、代々創業者の直系の子孫が引き継いでおり、現在は敦司の父である室月肇が社長を務めている。

栄一と肇は同じ年で、幼少期から高校まで同じ学校に通った仲だ。

もともと先代同士の仲が良く、二人が学生の頃はプライベートでもしょっちゅう行き来があったと聞いている。けれど、ともに代替わりしてからは急に疎遠になり、顔を合わせるのは組合の会合に出席する時くらいだ。

今でこそ元気に動き回っている栄一だが、少し前まで持病の腰痛が悪化して車椅子生活を余儀なくされていた。その間、栄一の代理を務めていたのは理沙であり、復帰した今もあれこれと雑務をこなすようになっていた。

理沙が知る会合時の二人は、近くにいても目は合わさないし挨拶すら交わさない。あからさまに喧嘩をするわけではないが、互いを避けているのは明らかだ。

そんなこともあり、栄一が諸手を上げて敦司からの買収話を受け入れているとは思えない。

しかし、結局は背に腹は代えられないということなのだろう。

理沙はポケットからスマートフォンを取り出し、敦司に今どこに居るのか訊ねるメッセージを送った。すると、実家にいるとすぐに返事が届く。

やはり、思ったとおりだ。

「室月ホテル&リゾート」の本社は都心のビジネス街にあり、敦司は普段そちらに居ることのほうが多い。しかし、今日は午後七時から温泉旅館ホテル組合の会合があり、副理事長を務めている敦

司は毎回欠かさず顔を出しているのだ。

どうせ話をするなら、一刻も早いほうがいい。

『買取の件で話がある』

そう送るとすぐに返信があつて、話し合いの場に彼の実家を指定された。

理沙はさらにメッセージを送り、これから会う約束を取り付けた。

「敦司、今実家にいるみたい。私、これから彼に会ってくるね。それで、疑問に思うことをぜんぶ聞いて、納得がいくまで話し合いをする」

よほど険しい顔つきをしていたのか、美和子が立ち上がった理沙のすぐそばに駆けつけてきた。

「理沙、お願いするわね。大役を任せることになっちゃったけど、くれぐれも喧嘩腰にはならないようにしてちょうだい」

昔から二人が言い合いをするのを見慣れている美和子が、心配そうな顔で理沙の頬にそつと掌を当てる。

美人でおっとりした性格の美和子は、いつも微笑みを絶やさない。そんな母は一家の癒^い的存在であり、その笑顔にはこれまでに何度となく助けられた。それだけに悲しむ顔を見るのはできる限り避けたいと思うし、これに関しては父も姉も同じ気持ちだろう。

「大丈夫。ぜつたい喧嘩腰にはならないし、冷静に話をするって約束する」

理沙は氣遣つてくれる母に向かって、にっこりと笑いかけた。そして、両親に見送られてリビングルームをあとにする。

玄関に向かう前に洗面所に立ち寄り、鏡に映る自分をまじと見つめた。

理沙はどちらかといえば父親似で、顔のパーツのすべてが丸っこく、程よい位置に収まっている。はじめに目が行くのは二重のどんぐり眼で、特別美人でも不美人でもないといった感じだ。

メイクをするとなぜか老け顔になるため、普段仕事の時に使うのはファンデーションとアイライナーのみ。プライベートに至っては色付きの日焼け止めクリームを塗って終わりだ。

「別に、このままでもいいか」

理沙はもともとちよつとガサツで、細かいことは気にしないタイプだ。

もちろん、悩みを抱えたり苦悩したりする時もあるが、根が明るく元気だからか、いつまでもクヨクヨするのは性に合わない。

結局、髪の毛を撫でつけただけで鏡の前を離れ、自宅の裏手から敷地の外に出て、温泉街とは反対方向に向かって歩き出した。

「武本旅館」は温泉街の端にあり、室月邸はここからさらに離れた位置にある。速足で行けば五分とかからないし、外にはまだ明るさが残っている。

（敦司ったら、なんで私に一言の断りもなく、話を進めたの？）

本音を言えば、とりあえず敦司を怒鳴りつけたくてたまらない。

けれど、母親に喧嘩腰にはならないと約束したし、まずは事実確認をして条件がどんなものか確かめなければ。

（冷静に。でも、敦司のほうから挑発してきたら？ ちよつとくらい言い返してもいいよね？）

彼は子供の頃から弁が立ち、思ったことをストレートに言う傾向がある。どちらかといえば口うるさく、三つ年下の理沙に対してはいつもどこか上から目線だ。

しかし、今でも顔を合わせれば声を掛け合うし、彼の昇進とともにほぼ機会がなくなっているが、時間があれば行きつけの店で長々と話し込むことだってある。

時には恋愛や将来について話し合ったり、相談に乗ってもらったり。

決して口には出さないものの、理沙は敦司のことをちよつとした親友くらいに思っていた。だからこそ、今回の話に関して何も言ってくれなかったことに憤りを感じる。

（なんで言ってくれなかったの？ 言えば、あれこれと口出ししそうだから？ そんなの、当たり前でしょ！）

腹立ちまぎれに敦司の顔を思い浮かべ、頭の中でその頬を思い切りつねる。

子供の頃、彼と口喧嘩になった時、理沙は実際に敦司の頬をつねろうとした。しかし、いくら手を伸ばしても彼の腕の長さまでしか近づくことができず、そのたびに諦めてアカンベエをしたのを思い出す。

（なによ！ いつも余裕綽々^{よゆうしやくしやく}って感じで憎たらしいたら……）

敦司は幼少の頃から眉目秀麗で、美男美女の両親のいいところを集めたような容姿をしている。オマケに頭脳明晰かつスポーツ万能である上に、カリスマ性もあって人を惹きつけるオーラまで兼ね備えている。それに加えて、生まれながらに経営者としての資質を持ち合わせているのだから、向かうところ敵なしだ。

理沙にしてみれば、それらのすべてが癪^{しやく}に障る要因でしかないが、当の本人が時にそれを逆手にとって挑発してくるのだから始末が悪い。

とにかく、納得のいくような説明をしてもらい、気になる条件とやらがなんであるかを確認しなければならぬ。

理沙は怒り心頭に発しながら歩き続け、それでもなんとか気を静めようと深呼吸を繰り返した。

以前は家族で住んでいた敦司の実家だが、今やそれぞれが都内に居を構え、こちらで全員が顔を合わせるのには月の半分にも満たないと聞いている。

（本社決済が下りているってことは、敦司のお父さんも買収の件を承知しているってことだよな）
父親同士の仲は良好とは言えないが、一流のビジネスパーソンたるもの、公私はきちんと分けているということだろうか。

しかし、いったい何がきっかけで疎遠になったのやら……

かつて仲が良かった幼馴染の二人は、今や成人した子を持つ既婚者同士だ。

以前聞いた話では、先に結婚したのは栄一で、肇はその一年後に既婚者になった。

美和子は都内に住むサラリーマン家庭に生まれ育ち、一人とは幼少期の習い事を通じて友達になったと聞かされている。栄一は優しく子煩悩で、父親としては百点満点の人だ。

その上、義理人情に厚く、努力家で真面目な性格は誰からも好かれる。

けれど、残念ながら経営者としては今ひとつで、決断力に欠けるところがあった。それが積み

積もつての今だろうが、まさか幼馴染が経営する会社を買収されることになるなんて想像すらしなかっただろう……

(さあ、着いた)

辿り着いた室月家は温泉街から少し離れた場所にあり、敷地は二百坪を優に超える。十五年前に建て替えた建物は二階建ての日本家屋で、庭に一步足を踏み入れるなり、見事に咲いたハクモクレンが目を引き。

子供の頃はよくここで遊んだが、来るのは「ホテル室月」の先代女将^{おかみ}が亡くなった時以来だ。

庭木は綺麗に管理されており、室月家の几帳面さが如実に表れている。

「いい香り」

理沙がハクモクレンの香りを胸いっぱい吸い込んでいると、飛び石の先にある玄関の引き戸が開き、中から敦司が出てきた。

「よう、久しぶり。そんなところで道草食ってないで、早く入れ」

敦司に呼びかけられ、理沙は仏頂面^{ぶつどうめん}で玄関に急いだ。

「あいかわらず、口が悪いわね」

文句を言いつつ飛び石の上を歩き、玄関に入ったところで敦司をじろりと睨みつけた。

それにしても、いつもながらビジュアルが良すぎる。

理沙の身長は百六十センチだが、敦司はそれよりも三十センチ以上高い。

敦司が理沙の顔を見てニツと笑う。その余裕ある態度に眉を吊り上げると、彼は「おお、怖い」

と言つてわざとらしく身震いをした。

背を向けた彼のあとをついて縁側を進みながら、綺麗に手入れされた庭の景色を眺める。

ふと懐かしい気分になったけれど、今は昔の思い出に浸^{ひた}っている時ではない。

「今日は俺一人だから、気兼ねはいらないよ。大声を出すなり暴れるなり、好きにしてくれ。その様子からして、俺に何かしら文句があるんだろう？」

「当たり前でしょ。どうして買収の件を私に一言も言わなかったの？」

「いろいろと忙しくてね」

「いくら忙しくても連絡くらいできたよね？ どうして秘密にしていたの？ さっき両親に聞いて、目が飛び出るほど驚いたんだから！」

つい大きな声を出してしまい、理沙はハツとして口を噤^{つぐ}んだ。

少し前を歩いていた敦司が、理沙を振り返ってフンと鼻を鳴らす。どこか面白がっているような彼の顔を見るなり、理沙は床を思い切り踏み鳴らしたくなった。

「まあ、落ち着けよ。とりあえず座って」

敦司に促され、理沙は縁側を挟んで庭に面した居間に入る。

八畳の和室の真ん中には長方形の座卓が据えられており、理沙は勧められるままに座布団の上に腰を下ろした。すぐにでも問いただしたい気持ちを抑え、ゆっくりと深呼吸をする。

「それで、条件って何？ どんな取引をしたらうちに経営権を残したまま『武本旅館』を危機的状況から救ってくれるの？」

理沙が訊ねるも、敦司は悠々とした態度を崩さない。彼はトレイから湯呑茶碗を載せた茶托を持ち上げると、理沙の前に置いてくれた。

「まずは、お茶をどうぞ。美味しい緑茶の茶葉が手に入ったんだ。一口飲んでみて感想を聞かせてくれないか」

わざと挑発するようなことを言ったかと思えば、急に違う話をして出鼻をくじいてくる。

敦司との会話はいつもこんな感じだし、油断していると彼のペースに巻き込まれてしまいがちだ。しかし、湯呑茶碗から立ちのぼる湯気からは、確かに深みのある茶葉の香りがする。

理沙は惘然としたまま湯呑茶碗にふうふうと息を吹きかけ、適温になるのを待った。

それにしても、いい香りだ。

深く感じ入りながら一口お茶を飲み、その芳醇な香りに鼻孔を膨らませる。

「美味しい……。深みがあつて甘さもある。これ、どこで手に入れたの？」

「武本旅館」では、宿泊客がやってくると女将自らお茶を淹れて歓迎の挨拶をするのが慣例になっている。

お茶はいわばウェルカムドリンクであり、そこには旅館のこだわりもてなしの気持ちが入められているのだ。

経営には口出しをしない理沙だが、その代わり任されていることに關しては、一切の妥協を許さない姿勢を貫いてきた。お客様に出すお茶の選定もそのひとつで、何度か敦司に相談を持ち掛けたこともある。

理沙の問いに敦司は惜しげもなく生産地などの詳細な情報を明かし、必要なら自分の名前を出して詳しく話を聞けばいいと言ってくれた。

ひとしきりお茶の話で盛り上がり、ふと気がつけば時計の長針が半周している。

いつものことではあるけれど、敦司の話のはぐらかし方は見事と言うしかない。

理沙は気を取り直して居住まいを直し、ごほんと咳払いをした。

「そろそろ話をもとに戻しましょう。単刀直入に聞くけど、敦司は何を企んでるの？ いったい、どんな魂胆があつて、うちを買収するなんて話になったのか教えてちょうだい」

理沙が努めて冷静な声でそう訊ねると、敦司が座卓で頬杖をついていた手を膝の上に戻した。

「企んでいるなんて、人聞きの悪い。買収の件を聞いたなら『武本旅館』が経営破綻に陥っていることも、もう知ってるよな？ 『武本旅館』はお前が思っている以上にヤバくて、今にも崖から真つ逆さまに落ちそうになっている。このままでは廃業は免れない」

敦司は険しい表情を浮かべ、座卓の上のタブレット端末を理沙の前に置いた。

それからおもむろに立ち上がり、理沙の近くにやってきてすぐ隣に腰を据える。

「こういうのは数字を見ながら話したほうが理解しやすい。まずは、これを見てください」

画面に次々に表示されるデータは、損益計算書やキャッシュフローなど、すべて「武本旅館」に關するものだ。

「この数字を見れば、わかるだろう？ 利益は出ているけど、儲かってはいない。借入金と返済があつて改築や設備投資に回す金がない。しかも年々支払い能力が低下しているから、追加の借入金

れは無理だ」

画面上の数字やグラフを示され、それについてわかりやすく説明する。

数字があまり得意ではない理沙に対して、敦司は国内最高峰の大学をトップクラスの成績で卒業したほどの秀才だ。

接客業務では負ける気がしないが、経営や資金管理に関する知識は彼のほうが豊富だし、太刀打ちできるレベルではなかった。

経営難についての話は父から聞いていたが、理解できていたかと訊ねられたら首を傾げざるを得ない。

けれど、敦司の説明の仕方が上手いのか、自分でも驚くほど彼の話が頭の中にスルスルと入っていくのがわかった。

「建物の老朽化もかなり進んでいるし、いくら料理が美味しくても客足が遠のく一方だ。外資系投資ファンド会社がどうして『武本旅館』に目をつけたのが気になるが、それはさておき、事態は急を要する」

敦司からわかりやすく説明されて、理沙は改めて「武本旅館」が崖っぷちの状態であることを理解した。

しかし、いずれにしても急な話すぎて、いったい何をどうすればいいのか見当もつかない。

「ごめん。もうちょっとだけ考えさせて」

理沙は焦る気持ちを隠そうとせず、唇をギュッと噛みしめた。

敦司が言うことはもつともだし、「武本旅館」が自力で持ち直すのは明らかに無理だ。

それはわかつてはいるけれど、今さらながら「武本旅館」が買収の憂き目に遭う現実に打ちのめされ、思考能力がゼロになる。

敦司の説明を受けてようやく現状を正しく理解した今、何も気づかないままにいた自分自身をひどく情けなく思う。

理沙がしよぼくれていると、敦司がいつの間にか空っぽになっていた湯呑茶碗に二杯目のお茶を注いでくれた。

「理沙が『武本旅館』をどうにかしたいという気持ちは、同業者としてよくわかる。その上で言うんだが、旅館を存続させたいと思うなら、うちからの提案を呑むしかない。そうじゃないか？」

常になら目線、何かというところからかかったりしてくる敦司だが、今の彼はそうではない。まるで教師みたいに丁寧で、こちらが理解できるように噛んで含めるように話してくれている。

けれど、それがわかるだけに、自分の無能ぶりが際立って情けなさに拍車がかかる。その挙句、行き場を失った憤りが自分の中で今にも爆発しそうになってしまふ。

「……買収なんて、嫌よ。私は次女で旅館の従業員に過ぎないけど『武本旅館』は私の大切な宝物よ。心の拠り所だし、これまで生きてきた土壌であり、根っこなの。それを買収とか……。どこが相手だろうと、そんなの無理に決まってる……！」

本当に無理なのは買収から逃れることであり、それは百も承知だ。

そうとわかった上で零す愚痴は、もはやただ駄々を捏ねているに過ぎず、みっともないことこの

上ない。

しかし、一度言い始めたら、そう簡単に口を閉じることではできなかった。

「敦司がなんと言おうと、『武本旅館』はうちの家族が守るべき根城なの。家族全員、旅館を守るために精一杯努力してきたし、お姉ちゃんだって『武本旅館』の女将になるために東京で修業しているのよ？ それなのに……とにかく、買収なんかぜったいに無理。私がそうさせない……。ぜったいに、そうさせないんだから……！」

ただそう言いたいだけの自分にうんざりしながら、理沙は下を向いて自分の左腕を痛いほど握りしめた。

本当に、情けない。

今にも涙が零れそうになり、理沙はそれを誤魔化すように、自分の腕を握りしめる右手にさらに力を込めた。

「わかってる。私がどうあがいても『武本旅館』は救えない。私にはどうにもできないし、そんな力があるはずもない。それはわかってるんだけど……」

「そんなに強く握ると、痣になるぞ」

敦司がそう言いながら理沙の右手の上に掌を重ねてきた。手の甲をそつと撫でられ、反射的に腕を掴んでいた指の力が弱くなる。その隙をつくように右手を引きはがされ、そのまま敦司の左腕の上に導かれた。

「掴むなら、俺の腕を掴め。それだつたら痣になる心配はないからな」

日頃から鍛えているのか、敦司の腕は思いのほか筋肉質で、少しくらい強く握っても痛くもかゆくもなさそうだった。

言われるがままに握ってみたが、指が肌に食い込まないどころか、硬さを増したような気がする。

「今、腕に力を入れてるでしょ」

理沙が指摘すると、敦司が小さく笑い声を上げた。

「バレたか。だけど、このほうが握りがいいがあるだろう？」

「まあ……そうだけど」

理沙は鼻の頭に皺を寄せながら、さらに強く敦司の腕を握る。けれど、ふと気がついてサッと手を離し、あらぬほうに視線を向けて二杯目のお茶に口をつけた。

「熱っ！」

あわてて湯呑茶碗から唇を離す理沙を見て、敦司がおかしそうに目を細める。

「そりゃあ、淹れ立てだからな。あいかわらずのあわて者だな。もともと猫舌なんだから、氣をつけて飲まないでダメだろ」

指摘され、理沙は素直に頷いて渋い顔をした。

あわて者なのも猫舌なのも、長年の付き合いでバレてしまった理沙の弱点のうちのひとつだ。バレているのだから隠しようがないし、それゆえの気軽さもある。

しかし、考えてみれば敦司の弱点はなんだろう？

お茶を飲みつつチラリと考えてみるが、すぐに思い当たらないのは彼がそれだけ完全無欠だから

だろうか。

「さつき、理沙は自分がどうあがいても『武本旅館』は救えないと言ったけど、それは違う。逆に、理沙だけが『武本旅館』を救えるし、救世主になれると言っても過言じゃない」

「え……それって、どういうこと？」

敦司の言っている意味がわからず、理沙は湯呑茶碗を茶托に^{ちやたく}戻しながら怪訝な表情を浮かべる。

「どういうことかって、それこそが理沙がここに来た理由であり、俺が理沙に説明しようと思っていた条件の詳細だ」

「そうだった！ 私はそれを聞くためにここに来たんだった」

うつかりいつものように話を逸らされて、本来の目的を忘れそうになっていた。

旅館の命運がかかっているというのに、なんというていたらくだろう！

理沙は自分を叱咤^{しった}しながら敦司のほうに向き直り、彼の腕を掌でパンと叩いた。

「私、敦司に会って疑問に思うことをぜんぶ聞いて、納得がいくまで話し合いをするって両親に言ってきたの。それから、ぜったいに喧嘩腰にはならないって、母と約束したわ。だから、大丈夫。何を言われても、とりあえず聞く姿勢は崩さないから」

自分に言い聞かせるようにそう話すと、理沙は背筋をシャンと伸ばした。

敦司と向かい合わせになって対峙し、一瞬ピリリとした緊張が走る。

これまでは、まだプライベートな感じだったが、ここからはもうビジネスの話し合いだ。

「さあ、どうぞ。うちが『武本旅館』の経営権を武本に残したまま資金提供を受けるには、どんな

条件があるのか、詳しく話してちょうだい」

理沙が意気込むのを見た敦司の顔から笑みが消え、一流ビジネスパーソンの表情にとって代わる。これほどの真顔は、組合の会合でもめったに見られない。

そう確信した理沙はにわかに緊張して、ゆっくり深呼吸する。

あまり効果が得られないまま、敦司が理沙のほうににじり寄ってきた。今にも膝がしらが触れ合いそうになり、理沙はいつの間にか口の中いっぱいになっていた唾をぐくりと飲み込んだ。

「条件は、理沙が俺に身売りすることだ」

敦司が言い、理沙の目をまっすぐに見つめてくる。

彼の目を見つめ返す理沙は、驚きのあまり眉を吊り上げて絶句した。

「……え？ わ、私が敦司に身売りって……それ、どういう意味？」

一瞬、聞き間違えたか、意味を取り違えたかと思った。けれど、彼の声ははっきりとしていたし、「身売り」という単語の意味も極めて明確だ。

それでも意味がわからず、理沙は眉間に皺^{しわ}を寄せて首を傾げた。その顔を見て、敦司が唇に微かな笑みを浮かべる。

「わかりやすく言えば、俺と結婚して『武本旅館』を救えばいいってことだ」

「はあ？」

ますますわけがわからなくなり、理沙は前のめりになって大声を出した。

その途端、敦司が上体を反らしながらしかめっ面をする。

「そんなに大声を出すと、びっくりするだろ。まったく、理沙は昔から声だけではなかったよな」
敦司に言われて、理沙は無意識に空^あいているほうの手で自分の胸元を押さえた。

『声だけではなかった』とは、そのままの意味に過ぎない。けれど、日頃から自分の胸が小さいことを気にしているせいか、ついそんな行動をとってしまったのだ。

「べ、別に普通でしょ！ それより、結婚って何？　なんで私と敦司が結婚するのが『武本旅館』を救うことになるのよ」

おかしいな反応をしたことを誤魔化そうとして、さつきよりも大きな声を出してしまった。

しかし、今はそれを気にしている場合ではない。

いきなりの申し出に驚き、理沙は混乱して目をパチパチと瞬^{またた}かせた。

「結婚して夫婦になれば、武本家は俺の義実家になる。妻の実家を支援するのはなんら不思議なことではないし、そもそも義実家であれば買収ではなく資金提供込みの業務提携に変更できる。うちの親父は今回の買収に関しては俺にすべてを一任しているんだ。だから、理沙がこの話に乗ってくれたら一事が万事、上手くいくんだが、どうする？」

「ど、どうするって……」

敦司とは長い付き合いだが、今まで彼を恋愛対象として見たことなど一度もない。当然、彼もそうだろうし、そもそも第三者的な視点で見たらこの結婚は、明らかに格差婚だ。

資産、スペックはもとより、ビジュアル的にも差がありすぎて、人が聞いたら冗談も大概にしろと言っただろう。

だが、彼はいたって真面目な顔をしており、冗談で言っているわけではないようだ。

「びっくりしすぎて頭の中がゴチャゴチャだわ。もうちょっとわかりやすく説明してよ」

「いいよ。じゃ、これを見て」

そう促されて座卓に向き直り、今一度タブレット端末を見た。

提示された画面には、買収と業務提携の違いなどを説明した文やイラストが表示されている。

条件なしの買収の場合、「武本旅館」の経営権は「室月ホテル&リゾート」側に移り、武本家はすべての権利を失う。

しかし、敦司が提示する条件を呑めば、「武本旅館」は「室月ホテル&リゾート」の資金提供を受けて再建できる上に、経営権は武本家から動かない。

それは栄一から聞いていた内容と同じだし、きちんと納得できた。

だが、なぜ「室月ホテル&リゾート」がそこまでする必要があるのかという疑問は残ったままだ。「買収と業務提携の違いは、よくわかったわ。でも、なんでそれが一事が万事、上手くいくことになるの？　そもそも崖っぷちのうちと関わって、『室月ホテル&リゾート』にどんなメリットがあるの？」

理沙が問うと、敦司はそんな質問は想定内だと言わんばかりに、タブレット端末の画面に別の資料を表示した。

「うちは今後、『武本旅館』のような純和風の宿泊施設を新たにオープンさせる予定なんだ。『武本旅館』への資金提供は、その足掛かりのひとつでもある」

敦司が言うには、同じ宿泊施設ではあるけれど、旅館とホテルには様々な違いがある。

頭ではわかつているが、実際に経営してみなければ知ることができない部分も存在するだろう。

『武本旅館』は彼にとつて、旅館と言えは真つ先に思い浮かぶ場所であり、今の状況はさておき、その歴史や経験値からは学ぶべきことがたくさんあるらしい。

「栄一さんと美和子さんからは、いろいろと教わりたいと思ってるんだ。買収となると『武本旅館』はうちが完全支配することになるけど、業務提携なら同等な協力関係でいられる。そのほうがお互いにやりやすいだろう？」

「確かにそうだろうけど……」

業務提携すれば「武本旅館」は「室月ホテル&リゾート」の資金提供を受けて施設を改修し、新たな顧客を獲得すべく何かしらのアクションを起こすことも可能だ。その手助けをする中で、敦司は旅館業務に関する知識を深め、同社の新規事業に活かすつもりでいるらしい。

同時に「室月ホテル&リゾート」は「武本旅館」の立て直しに全面的に協力し、その後の支援についても完全に保障してくれるとのことだ。

「うちは今でこそ全国展開しているが、始まりは『ホテル室月』だ。俺はこの地で生まれ育つたし、温泉旅館ホテル組合の副理事長として、地域にそぐわない建物の建設を許すわけにはいかない」

「それについては私も両親も同意見よ。だけど、なんで私なの？ どうせなら美人で才女のお姉ちゃんと結婚したほうがいいんじゃない？」

理沙がタブレット端末から顔を上げると、同じタイミングでこちらを見た敦司と視線がぶつ

かった。

思いのほか距離が近く、理沙は少なからず動揺して言葉を詰まらせる。

今まで平気で軽いボディタッチをしていたのに、急になんだろう？

「結婚」という言葉が、急に現実味を帯びてきたから？

戸惑いながら仰け反る理沙を見て、敦司が片方の眉尻を吊り上げ、ふっと笑う。

「仮に環にこの話を持ち掛けたとして、あいつが受け入れると思うか？」

「それ、どういう意味？」

「意味ってなんだ？ 別にそのままの意味だよ」

敦司はそう言うが、環は母譲りの美人で、かつて敦司と成績の良さを争ったことがあるほどの才女だ。

かたや理沙の顔面偏差値は十点満点中、六か七程度。成績は概ね平均的で、得意科目は特にない。環は昔から華奢な体形で、それは今も変わらない。

一方の理沙は上半身こそほっそりしているが、下半身はどっしりとした安産型。

中学から大学までバスケットボールに打ち込んでいた姉と、運動が苦手な妹。

つまり、敦司が言わんとしているのは、すべてにおいて優秀な環よりも、全体的にイマイチな理沙のほうが受け入れられる可能性が高いということなのだろう。

それがわかるなり、むかつ腹が立って表情が曇りそうになる。

しかし、敦司の申し出を受けて条件を呑むよりほかに手立てがないときちんと理解した今、感情

だけで突っ走るわけにはいかなかった。

それに、すべて事実だから、怒っても仕方がない。

「無理でしょうね。そもそも、お姉ちゃんにはもう何年も付き合っている彼がいるし」

環は自分の恋人を一度実家に連れ帰ったことがあり、理沙も顔を合わせている。彼は環が将来「武本旅館」を継ぐと承知しており、その上で結婚を望んでいた。

「その話なら知ってるよ。大学時代から付き合っている人のことだろう？ 将来的に結婚して『武本旅館』を継ぐつもりだって聞いている」

驚いたことに、敦司は環の恋人の存在を知っているばかりか、ちょっとした知り合いでもあるらしい。

それはともかく、彼は結婚というものをどう捉えているのだろうか？

自他ともに認めるおしどり夫婦である両親は、誰が見ても互いに深く愛し合っているのがわかる。そんな父母を見て育った理沙は、いつか自分もそんなふうに想い合える人と巡り合い、結婚したいと思いつけてきた。

けれど、実際はそう上手くいかず、出会いはあってもなかなか恋愛に発展しない。過去、二人の男性と付き合ったが、結局別れてしまい、もう三年も男っ気なしだ。

そのことは敦司にも話したし、逆に彼の過去の恋愛についてもいろいろと知っている。

敦司とはそれほどざくばらんな付き合いをしてきたので、まさか二人の間に結婚の話が出るなんて思ってもみなかった。

「どうだ？ 環と『武本旅館』のためにも、この話は悪くないと思うぞ」

「お姉ちゃんのため？ それってつまり、私が敦司との結婚を承諾しなければ、この話はお姉ちゃんにいくつてこと？」

理沙の質問に、敦司は何も言わないままひょいと肩を竦めた。

要は、環と恋人の仲を邪魔されたくなければ、申し出を受けろということだろう。

なんだかジリジリと追いつめられていくような気持ちになったが、旅館を助けないという強い思いが、自分の乙女心を凌駕（りやうが）しつつある。

「敦司自身はどうなの？ 私と結婚して後悔しない？」

「しないな。すると思つてたら、そもそもこんな話は持ち出さないよ」

「ふーん……」

敦司から聞いた彼の過去の恋愛を思い出してみると、どれも短期間であった上にサラリとした付き合いばかりだ。遊びで関係を持ったりはしなかっただろうが、将来を誓い合う感じでもなかったと思う。

彼自身、今までに結婚を考えた女性は一人もいないと言っていた。

しかし、ハイスペックな美男子ゆえに、黙っていても相応の女性からひっきりなしにアプローチをされているようだ。そのせいで、恋愛にうしろ向きになってしまったのだろうか？

いずれにせよ、敦司にとって結婚は恋愛の延長線上にあるものではないということだ。

「敦司って、つくづくドライだね。ちなみに、結婚の件は室月のおじさんやおばさんは承知して

いるの？」

「いや、まだ話してないから、承知してくれるかどうかはわからないな」

「まだって……。たぶん——ううん、ぜったいに反対されるわよ」

「子供じゃあるまいし、反対されてもどうってことないだろう。昔ならいざ知らず、今時親の承認がなければ結婚できないなんてことはないんだし」

「それはそうだけ……」

「理沙はどうなんだ？ 俺との結婚は悪くないと思わないか？」

敦司がいつになく魅力的な笑みを浮かべながら、理沙に顔を近づけて目をじっと覗き込んでくる。

「そりゃあ『武本旅館』のためを思うなら……って、ちよつと待つてよ。そうやって、そっちのペースに巻き込もうとしないですよ！」

「別に、そんなつもりはないよ。ただ、俺と理沙は気心が知れた仲だし、ずっと一緒にいても苦にはならなさそうだろう？」

「はあ？ なにそのうしろ向きな恋愛観」

「いや、俺は至極前向きだよ」

「どこがどう前向きなの？」

敦司とは口喧嘩もするが、彼とのテンポのいい会話は楽しいし、いつまでも話し続けていられる気がする。

しかし、絵に描いたような格差婚だし、理沙の両親はともかく、室月夫妻がこの話に頷くとは到

底思えない。だが反対されたからといって大人しく引き下がる敦司ではないし、彼がこれほど強硬な態度をとっているとすると、それだけ考えた末の結論なのだろう。

どうであれ、すんなりと行く話ではないことだけは確かだ。

「要は本人同士の気持ちだし、『武本旅館』の件については俺が全責任をもって事に当たるつもりだ。初期投資は必要だけど、マイナスをプラスにする自信はある。もちろん、具体的な策については武本側と相談して決めることになるだろうが——」

敦司から聞かされる話は、理沙にとって寝耳に水であり、信じられないようなものばかりだ。

それは彼の両親も同じだろうし、突然こんな提案をされて、はいそうですかと聞き入れるはずがない。

敦司の父親である室月肇は生真面目そのもので、経営者としての手腕は誰もが認めるところだ。性格は寡黙で、めったに笑顔を見せずかなり近寄りがたい。妻の咲子^{さきこ}は元不動産会社の社長令嬢で、肇とは見合い結婚だったらしい。

かつて実父の秘書を務めていたという彼女は「室月ホテル&リゾート」の取締役の一人で、ゴルフ部門の責任者でもある。

拔群のビジネスセンスを持つ夫婦は、ともに力を合わせて「室月ホテル&リゾート」の事業を拡大させてきた。そして今、彼らの一粒種である敦司が、それをさらに広げようとしているわけだ。

その彼が、なぜか今、自分との結婚を望んでいる。

家業に勤しむ者として、説明された事情はわからないでもない。

しかし、いくらなんでもそのために夫婦になろうなんて、耳を疑うし常軌を逸している。しかも、姉がダメなら妹でいいという流れであり、理沙が密かに夢見ていた愛し愛されての結婚とは雲泥の差だ。

けれど、この先自分に理想的な結婚相手が現れるとは思えない。そうであれば、いつその話を受けてしまったらどうだろう？

敦司の言うとおり、彼とはしょっちゅう喧嘩はするが、長年付き合ってきて気心も知れている。何より、彼と結婚すれば崩壊寸前の「武本旅館」を立て直せるし、環と恋人の結婚話を邪魔されずに済むのだ。

ビジネスに重点を置いた考え方をすれば、この話は素直に受けてしかるべきだ。買収ではなく、業務提携。

ならば、敦司との結婚だってその一環のつもりで受け入れたらいいのだ。

理沙は座卓の一点を見つめながらひとしきり考え込んでいたが、ふと顔を上げて敦司を見た。

「話の内容は、よくわかった。でも、どう考えてもうちのほうにメリットがありすぎない？ もしかして、ほかにも何か狙いがあるんじゃない？」

探りを入れるような目で敦司を見ると、彼はにつこりと微笑んで軽やかな笑い声を上げた。

「さすが理沙だ。実は、ひとつ交換条件がある。仮にも夫婦になるんだから、妻としての役割をきちんと果たしてもらいたいんだ」

「えーっと、それは具体的にはどういうこと？」

「理沙も知つてのとおり、俺は今まで何人かの女性と付き合ってきたが、誰とも本格的な恋愛には発展しなかった。それには、いくつか理由があるんだが……まあ、それは置いておくとして——」

敦司がおもむろに居住まいを正したのを見て、理沙も改めて座布団の上に座り直した。

「俺は将来的に室月家を継いで『室月ホテル&リゾート』のトップに立つつもりだ。後継ぎであるからには結婚して子供をもうけることを期待される。俺もできたらその期待に応えたいと思ってる。つまり、理沙に俺との子供を産むことに前向きになってほしいんだ」

「あ……ああ、そういうことね」

要は、夫婦の間で子供を作りたいということだ。

ごく普通の考えではあるけれど、驚きすぎて変な声が出た。

なるほど、「室月ホテル&リゾート」の御曹司である敦司の妻になるなら、後継者を望まれるのは当然だ。

しかしそうになると、敦司と男女の関係になる必要がある。

いや、夫婦になるのだからそれは当たり前だが、如何せん、この結婚には双方とも恋愛感情が皆無だ。

あるとすれば腐れ縁的な友愛か、積年培ってきた絆きずなくらいのものだろうか。

理沙にとって、敦司は幼馴染であり長年の喧嘩友達だ。

これほどの美丈夫だから、ほんのたまにだが彼に異性を感じることはある。けれど、セクシアルな感情を抱いたことなど一度たりともなかった。

「むろん、夫婦になったからといって子供ができるとは限らないし、結婚前にブライダルチェックをするっていうのもいいかもしれない」

敦司があれこれと言っている間も、理沙は彼との結婚について目まぐるしく考えを巡らせていた。予想だにしない展開に気持ちがいまいち付かず、話を聞けば聞くほど頭の中は混乱するばかりだ。それでもなんとか落ち着こうと努力し、現実的な考え方をしようと必死になる。

「敦司との子供を作る……ってことは、つまり、そういうことよね？」

「そういうことって、セックスのことを言っているのか？ まあ、子作りにはいろいろと方法があるだろうが、それが一番手っ取り早いし確実だろうな」

「ぐっ……」

またしても変な声が出そうになり、理沙は唇をグッと噛みしめて鼻孔を膨らませた。さりげなく湯呑茶碗の手に取り、残っていたお茶をぜんぶ飲み干した。

冷静になって考えてみると、敦司は普通ならどう頑張っても得られないほどハイクオリティな男であり、彼との結婚はまさに玉の輿^{たまご}と言える。

それはともかく、敦司とベッドをともにする——そう思うと、にわかに顔が赤くなり鼓動がとんでもなく速くなった。

さっきから感じていたことだが、彼との結婚が現実味を帯びるにしたがって、理沙の中で敦司の存在が急激に変化し始めている気がする。

はつきりとはわからないが、彼に対する自分の意識が変わりつつあるのかもしれない。

その証拠に、にわかにソワソワして落ち着かなくなってきた。それを誤魔化すように咳をすると、敦司が座卓の端に置いてあったお茶のペットボトルを手渡してきた。

「冷たいけど、飲むか？」

理沙は無言で頷くと、急いでペットボトルの蓋を開けて、ぐくぐくと喉を鳴らしながらお茶を飲んだ。

中身が半分ほどになったペットボトルを座卓の上に置くと、敦司がそれを手に取って悠然^{ゆうぜん}と残ったお茶を飲み始めた。

（か、間接キス……）

もしかすると、今までにもこういうことはあったかもしれない。けれどもしそうだとしても、今のうちに過剰反応などしなかったはずだ。

それなのに、どうして——

理沙はそんな自分に戸惑って、下を向いて視線をうつろわせた。

「あ……でも、加奈^{かな}さんは？」

「加奈さん？ ……ああ、和久^{わく}井課長のことか。どうして今、彼女の名前が出てくるんだ？」

和久井加奈は「ホテル室月」の営業推進部内にあるマーケティング課の課長であり、温泉旅館ホテル組合にも頻繁に顔を出しているため、一応理沙とも顔見知りだ。

「敦司って、加奈さんと割と仲がいいよね。彼女、美人でバリキャリだし、結婚するなら私より彼女のほうがふさわしいんじゃないかって」

容姿端麗で仕事もできる加奈は、現在二十八歳のシングル。以前モデルをしていたというだけあって抜群のプロポーションをしており、ワンレングスのショートボブがよく似合うクールビューティーだ。

とはいえ、理沙はほとんど彼女と話したことはないし、聞くところによると、かなり上昇志向が高くてきつい性格らしい。

実際、どうしてだか理沙は彼女にあまりよく思われていないようで、用事があつて話し掛けるとあからさまに迷惑そうな顔をされる。

それはさておき、以前組合の飲み会で小耳に挟んだことだが、加奈は敦司とたいそう仲が良く、社内ではお似合いのカップルと言われているようだ。

理沙がそう話すと、敦司が怪訝な顔で首をひねる。

「俺と和久井課長の仲がいい？ 誰がそんなデマを流したのか知らないが、俺と彼女はあくまでも仕事上の関係で、それ以外の関わりは一切ない」

「そうなの？」

「当たり前だ。彼女は確かに飛び抜けて優秀だけど、それが結婚する理由にはならないな。そもそも、そう考えるほど彼女のことを知らないしね。それに引き換え、理沙のことは昔から知っているし、扱い方も心得ている」

「それはつまり、私なら扱いやすいって言いたいわけ？」

「まあ、そういうことだ」

「やっぱり」

一気に鼻白んだ顔をする理沙を見て、敦司が愉快そうに笑い声を上げる。

結婚だの子作りだのと言われて、ついパニックに陥ってしまった。

だが、結婚をビジネスの延長線上に考えるほどドライな敦司だ。彼にとつては理沙との間に子供を作ることさえも、仕事の一環に過ぎないのだから。

だからといって、やることをやらなければ子供もできないわけで。

それさえなければ、もつと楽にこの話を受け入れられるのだから……

（でも、敦司はさつき「子作りにはいろいろと方法がある」って言ってたし、必ずしも実際にするとは限らないのかも——）

「それに、俺と結婚すれば理沙の夢も叶うだろう？」

唐突にそう言われ、理沙はキョトンとして敦司を見た。

「え……どうということ？」

理沙が首をひねると、敦司が飲み終えたペットボトルをポンと叩いて座卓の上に置いた。

「理沙だって、本当は『武本旅館』を継ぎたいんだろう？ でも自分は次女で、次期女将になるのは環だ。理沙はそれを仕方のないことだと割り切って、本音を抑え込みながら従業員の一人として日々業務に当たっている。そうじゃないか？」

ズバリと本心を言い当てられ、理沙は少なからず驚いて口を半開きにしたまま、まじまじと敦司の顔を見つめた。

「なんで、それを？ 私、今までそんなふうに言ったことないよね？」

「ないけど、普段の理沙を見ていれば一目瞭然だ。俺と結婚すれば、将来『ホテル室月』の女将になれる。なんなら、うちが経営するほかのホテルでもいいし、それでももの足りなければ新しくホテルか旅館を作るっていうのはどうだ？」

敦司がグツと顔を近づけて、理沙と視線を合わせてくる。

「え？ ええっ？」

矢継ぎ早に予想外の提案をされて、理沙は瞬きをするのも忘れて彼の瞳に見入った。

まさか、自分のひた隠しにしていた思いが敦司にバレていたなんて。

理沙は驚くと同時に、彼の観察眼に舌を巻いた。

「もちろん、理沙の覚悟と努力次第だけど、もし理沙がそう願って努力した末に実現したなら、それは理沙の夢が叶ったことにならないか？」

「うん、そうだね」

あまりに現実離れた話だから、さすがにピンとこない。けれど、それが実現することを想像すると、ワクワクが止まらなくなった。

それが顔に出たのか、理沙を見る敦司の目が綺麗な三日月形に変わる。

「理沙がやる気なら、俺は協力を惜しまないし、全面的にバックアップをさせてもらおう。前々から考えていたんだが、理沙は女将に向いていると思う。あわて者だし、かなり抜けているけど、細かいところに気がついたり、物事をまったく別の角度から見たりするだろう？」

「ちよっ……それって、褒めてるの？ それとも貶してるの？」

「もちろん褒めてるに決まってるだろ。人とは違う視点を持つのは望んでできることじゃないし、それもひとつの才能だと俺は思う」

サラリとそう言い切られ、嬉しさに頬が緩む。

「そっか……ありがとう」

昔からからかわれたり、余計な一言を言われたりするのに慣れているから、つい冗談めかして詰め寄ってしまった。

それだけに、ストレートに褒められるとなんだか妙にこそばゆい。しかし、敦司に女将に向いていると言ってもらったことが思いのほか嬉しかった。

（敦司に褒められるなんて、かなりレアだね。いったい、どういう風の吹き回し？）

ただ、思い返してみれば、敦司がからかう対象は理沙の知る限り、自分だけだ。

子供の頃から元気で明るい性格の理沙は、割と誰とでもすぐ仲良くなるし、年齢を問わず人からよく慕われるタイプだ。その分、親しみを込めてからかわれることがあった。大人になった今は、さすがにそんなことはめったにないが。

しかし、温泉旅館ホテル組合などで顔を合わせた時は、昔のノリで少々度が過ぎる軽口を叩いてくる者がいる。

そして、その場に敦司が居合わせようものなら、彼は憤然として抗議し、理沙に謝るよう相手に詰め寄るのが常だった。

自分がからかうのはいいけれど、ほかの者がそうするのは許さない。

そう考えると、敦司はからかいやくだらない冗談などから理沙を守ってくれる、自分本位な騎士^{ナイト}と言えなくもない。

ふと、そんなことを考えてニヤついていると、自分を見つめる敦司までなぜか口元を緩めているのに気づく。

「なあに？ ニヤニヤして、変なの」

「理沙こそ。何かよからぬことを考えていたっばいけど……どうだ、図星だろ？」

「ふふん」

理沙が口を一字にして黙っていると、敦司が小さく笑い声を漏らした。

「とにかく、ぜったいに悪いようにはしないし、後悔はさせない。『武本旅館』の立て直しについては、俺が責任をもって最後までやり遂げる。もちろん、理沙や武本家の人たちと話し合いながら進めさせてもらう。どうだ？ 俄然、俺との結婚に前向きになったんじゃないか？」

「そうね。まあ、そう言えなくもないかな」

敦司に軽い調子で問われて、彼と同じトーンで返事をする。

長年こうして付き合ってきた関係性は、伊達^{だて}じゃない。

理沙は、結婚という突拍子もない提案をしてきた幼馴染の顔をじつと見つめた。そして幾分冷静になって、彼の妻になる可能性を今一度よく考えてみた。

「室月ホテル&リゾート」は、業界ではトップスリーに入る大企業だし、彼の言うようにがむしや

らに努力すれば、理沙もいずれそれなりの役職につけるかもしれない。

しかし、都会に居を構える敦司や環に対して、理沙は生まれてこの方、地元を離れたことがない。高校卒業後は自宅から通える場所にある短期大学で観光学^{おきさくがく}を修め、その後はどこかに就職することなく、当たり前のように「武本旅館」で働き始めた。

もともと、家業の手伝いは高校生の頃からしていたし、庭で繋がっていることもあって、旅館にはしょっちゅう顔出しをしていた。

いわば「武本旅館」は理沙の生活の一部であり、そこから離れるなんて考えたことがなかった。これまで「武本旅館」が生活のほとんどだったが、敦司と結婚すれば自分の環境は激変し、世界は一気に広がるだろう。

そう思うと、にわかに気分が高揚し、身体中がボカボカしてきた。

むろん、まだ戸惑いのほうが大きい。けれど、実現したら想像もしなかった未来が開けてくるのだ。

「私、『武本旅館』が本当に大事な^{おかみ}の。女将にはなれないけど、あそこは私が一番多くの時間を過ごした場所であり、生きてきた証みたいなどころなんだもの」

「うん」

多くは語らないが、その一言で敦司が理沙の言わんとすることを理解してくれたのがわかった。

きつと、敦司にとっては「ホテル室月」がそうであり、二人は同じくらい自分たちのその場所を愛している。

「だけど、本当に大丈夫？ 結婚するとになると家族や親族も関わってくるし、彼氏とか彼女と違って簡単には別れられないんだよ？ 私の記憶が正しければ、敦司って恋人ができていっても半年以内に別れちゃったよね」

「確かにそうだな。原因は俺が恋人よりも仕事を優先したから。そう言う理沙も、俺と似たようなものだろう？」

「そうよ。『武本旅館』は万年人手不足だし、そうせざるを得なかったんだもの」

調理場担当などの専門職は別として、「武本旅館」での業務は、そのほとんどを理沙と両親が担っていた。

そのため、理沙はデートよりも仕事を優先させるしかなかったし、仮に両方を天秤にかけたとしても、迷わず旅館の仕事をとっていただろう。

理沙はそれだけ「武本旅館」を大事にしてきたし、今もそうだ。

かたや、敦司も恋愛そっちのけで「室月ホテル&リゾート」の仕事にあたっている。

「俺も理沙も仕事に熱を入れるあまり、恋人が二の次になってた。忙しくて基本、電話には出ない。メッセージが送られてきても返事をするのは仕事が一段落ついてから。仕事と恋人とどっちが大事か、と聞かれて迷わず仕事と答えてしまう——それが俺たちだ」

「そうだね……。そう考えると、私と敦司って、そういうところはすごく似てるのかも。もしかして、それもあつて私と結婚しようと思ったとか？」

「それも理由のひとつかな。似た者同士は、夫婦になっても上手くいく確率が高い」

敦司の言う確率の信ぴょう性はさておき、彼と話しているうちに腑に落ちることが多々あった。

敦司はきつと、様々なことを考えた上で自分との結婚を決めたのだろう。

「さすが、業界でも一目置かれる一流のビジネスパーソンだなあ。敦司にとって、恋愛も仕事のうちなんだね」

「いや、そればかりじゃないな」

「え？」

「それと、これは俺から言い出したことだから、結婚にまつわるものはもちろん、今後の生活に掛かる費用はすべて俺が負担させてもらう。理沙の稼ぎは自分の好きにしていいいし、俺は一切口出ししないって約束する」

「ちよつ……いくらなんでも、それは私に都合がよすぎない？」

「そうか？ 俺はむしろ俺に都合がよすぎると思ってるくらいだよ」

敦司はそう言って、タブレット端末の画面をトンと叩いた。新しく表示されたのは、妊娠から出産までの流れが書いてある図表だ。

「子供を作るからには、理沙は十カ月もの妊娠期間を経たのちに、出産という大仕事をやり遂げなければならぬ。妊娠出産に関する辛さや痛みを代わることはできないけど、できる限りサポートをするつもりだ」

図表には妊娠の月齢ごとに胎児や母体の様子がイラスト付きで記入しており、別の枠には様々な注意点や、夫の役割について書かれている。

「子供が生まれたら、夫婦二人三脚で子育てが始まる。お互いにはじめてだから戸惑うことだらけだと思うし、仕事との両立にも苦労するだろうけど、その都度話し合って一緒に乗り越えていこう」

そう話す敦司の顔はとても真摯^{しんし}だった。

世の中には口先だけの良き父親が大勢いると聞くが、敦司は昔から有言実行の人だ。

それにしても、彼が夫としてここまで理想的な人だとは想像もしていなかった。

彼の意外な面を知り、理沙はポカンと口を開けたままその顔をまじまじと見つめた。

「なんだか、ちょっとびっくり。敦司って、もつと亭主闖白^{ていしゅくはく}っていうか、古い考え方をする人なのかと思ってた。もしくは子育てもプロに任せるとか」

敦司の両親はともに仕事熱心で、一人息子の子育ても住み込みで雇い入れた専任のナニーに任せていたと以前聞いたことがあった。

「俺はこう見えて子供好きだからな。理沙も知ってるだろう？」

「それは知ってるけど、自分の子供となると責任とか苦労が段違いだっていうでしょ」

「これから仕事がどんどん忙しくなることを考えると、プロに任せるのもひとつのやり方だ。だから、どうしても必要になったらその時にまた話し合って答えを出せばいいかな、と」

「うん、そうだね」

外見からするとそうは見えないが、敦司は大の子供好きだ。組合主催の行事がある時でも、率先して子供たちの面倒を見る。しかも、仕事同様全力で相手をするから子供たちに大人気だ。

理沙はいえ、正直あまり子供の相手は得意ではない。だからといって決して嫌いなわけではなく、むしろ可愛いと思う。ただ、扱いに慣れていないせいで不安が先に立ってしまうのだ。

それに漠然^{ぼくたん}とはあるけれど、結婚するなら子供は欲しいと思っていた。

とはいえ、これまで具体的にはじっくり考えたことがなかったし、今は敦司との結婚自体が衝撃的すぎてそれどころではない。

「理沙は、どうだ？ 俺が見たところ、子供の扱いがイマイチわからないって感じだけど」

「わかる？ 実はそうなんだよね。……こんなので、子育てなんかできるのかな？」

「大丈夫、俺がついてる」

自信たっぷりと言われて、多少気が軽くなった。

きつと、これからも考えなければならぬことや悩みが出てくる。けれど、敦司とならどうかやっていけるのではないだろうか。

「特に、子供が小さいうちなんて、あつという間だ。そんな貴重な時間を仕事だけに費やすなんて、もったいなさすぎる。子育てを母親に任せきりの父親が多いと聞くけど、俺はまっぴらごめんだ」

彼は自分との結婚を実現させるために、いろいろと調べたり考えたりしたのだろう。

急な話で何かと頭が追いつかないが、敦司となら良きパートナーとして一生をとものにできそうな気がする。

何にせよ、いろいろと話をし、ようやく気持ちが固まった。

「わかった。私、敦司が出した条件を呑むわ。——いわば『身売り婚』？ 受けて立つわ」